

(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	クリニックでの在宅訪問栄養指導の立ち上げから今後の課題
演者名	竹内 圭志 福原 由美
所属	すずらんクリニック

目的

当院は在宅療養支援診療所として、年間 100 人程度のお看取りを行っている。
ターミナル患者は経口摂取が出来なくなってしまうと衰弱が進み、短期間でお看取りに至るケースが多い。在宅療養を希望される患者や家族は胃瘻や経管栄養を希望しないことが多く、経口摂取により体力を維持し、少しでも長く穏やかに過ごせるようサポートしていきたいという思いから 2014 年 4 月より栄養指導を開始した。

実践内容

栄養指導の導入として、患者や家族に栄養士の存在を認識して貰うため約 1 か月半、訪問診療に同行する事から始まった。その後、医師や看護師と連携しながら対象者を選定し栄養指導を開始した。

最初の患者は 6 年前より ALS を発症し 2 型糖尿病を併せ持つ自宅療養中の 75 歳男性と、慢性腎不全ステージ 3 施設入居中の 88 歳男性で、生活環境も性格も全く異なる二人だった。2014 年 10 月時点では栄養指導の対象患者 11 名、これまでの指導回数は計 56 回となっている。

実践効果

医師の診察に同行した事で患者、家族に顔を覚えて貰う事は勿論、訪問看護師、薬剤師やケアマネージャーなど多職種とコミュニケーションが取れ、患者に関する事のみならず薬の知識や介護保険についてなど情報共有の幅が広がった。

考察

約半年間試行錯誤を続け一定の成果がみられるが、施設入居中の患者への介入では施設のスタッフやケアマネージャーと疎通が上手くいかないこともあり、多くの課題が残っている。在宅訪問栄養指導では医師や訪問看護師、ケアマネージャーや施設の介護職員といった多職種との連携が不可欠であり、栄養士も在宅ケアチームの一員として患者情報を共有できるよう円滑な連携体制を築く必要がある。これからも患者や家族、在宅医療に関わる多職種の方々に在宅訪問栄養指導の有効性を理解してもらい、活動を継続していきたい。